# ユリーと砂漠のグルメ。

作・挿絵／Chatarou

【前書き】

短編ですが時系列的にはエンディングＳＳの続きにあたるストーリーです。

一画面に文字が全部収まるように、ＰＤＦの倍率を変えるか、ＰＣの解像度を調節すると見やすいです。ただし倍率が１００％から離れるほど画像は崩れます。

【あらすじ】

大変だわ！砂漠であたしを助けてくれたおじいさんのパン屋さんが潰れそうなんだって～。命の恩人を見捨てたとあっちゃ～、シャーロット家の名が廃るってもんでしょ。こうなったらあたしが一肌脱がないとね？

【ユリーの簡単な設定】

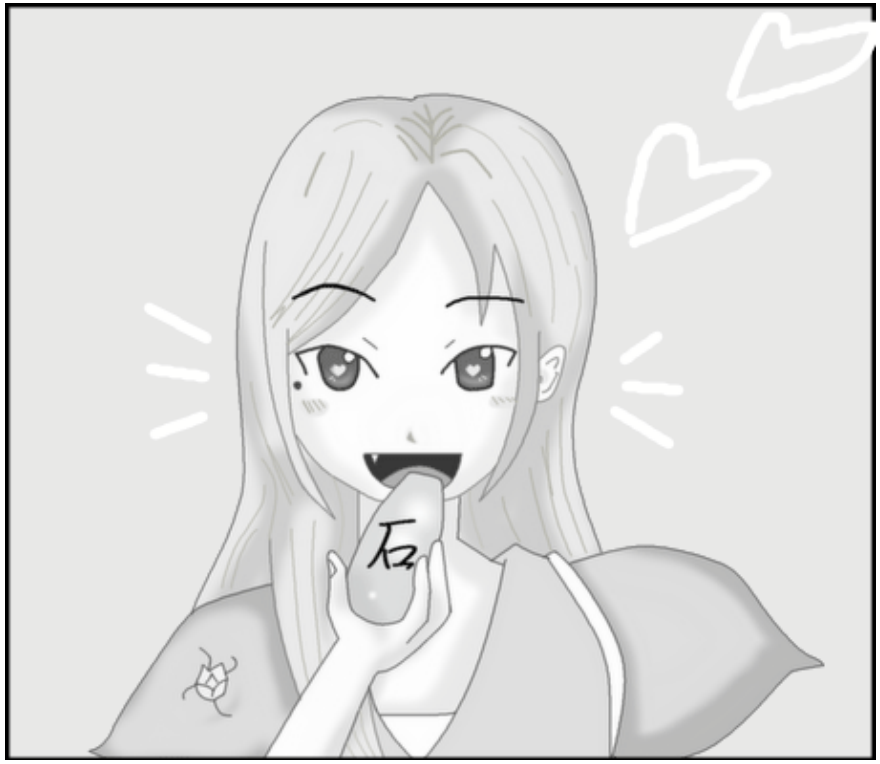
職業　僧侶。

属性　地。

特技　怪我人や病人の治療／筋力や魔力の増強／上記の応用として解毒魔法を用いた食品の保存等／攻撃魔法ストーンエッジ／

# 第一章　死にかけの巫女

ぐる～ぎゅるぎゅるぎゅる～。
お腹が鳴った。ここ２日間飲まず食わずである。
ユリーは落とした視線の先にある石を見て言った。
「パンだわ。パンがあるじゃないの。いぇい！」
ユリーは石にかじりついた。
「ふぎゃ・・・ぺっぺ・・・」
乾いた砂の味に目を白黒させた。



もうムリだと、ユリーは両手を広げて、パタンと仰向きに倒れた。そしてどこまでも青い空を眺めながら呟く。

「サイアクだわ・・・。」

そしてユリーは思う。敬謙な神の使いたるあたしが、どうしてこんな目に遭わなくちゃいけないのよ。神様はふざけてるんじゃないかしら。

砂漠を渡るときはガイドを雇うのが常識だが、ユリーは一人で砂漠に入った。

もちろん彼女だって最初から一人で砂漠を渡ろうと思ったわけではない。最初はちゃんとガイドを雇い、ラクダを借りていた。

しかしひょんなことからラクダとガイドにプライドを傷つけられたユリーは、あんたらクビ！と言い残して結局一人で砂漠に入っしまった。

地図では東に2日歩くだけで、目的地である国境の街ガラスベスに到着する。だからユリーはガイドなしでも行けそうだと思った。

それがどうしたことだろう。自分はかれこれ1週間もこの砂漠をさまよっているではないか。

プライドの高いユリーは、自分が遭難したことをなかなか認めようとしなかった。筋力増強魔法を自分にかけては、南北に長い砂漠を、見当違いの方向へあなたこな

たと歩き回った。

砂漠に入って5日めで食料は底をつき、水筒の水も空になった。ここでしぶしぶユリーは自分が遭難したことを認めた。

そして砂漠に入ってから1週間目になる今日、喉の渇きに耐えかねたユリーは賭けに出た。

ユリーは、必殺の攻撃用大地魔法（ストーンエッジ）を使い、地下水を掘り当てようと思ったのだ。砂漠の真ん中にオアシスがあるくらいだし、この砂の下には高い確率で地下水脈があるはずだ、と安直にそう考えた。

ユリーが長い呪文の詠唱を終えると、ピンポイントで地中の岩盤が激しく突き上げられて、その上にある大量の砂が宙を舞った。

しかしほぼ真上に飛ばされた砂は、そのまま落下すると、元の場所に落ち着いた。地面には、ほとんど穴なんて開かず、計算の外れたユリーの口だけが、あんぐりと開いた。

地下水脈を掘り当てるのは、どうやらガラスベスに到着する何倍も難易度が高いようだ。

ユリーは諦めて砂漠を歩き回った。体力のないユリーは頻繁に疲労回復の魔法を自分にかけた。

十分な睡眠と食事を取らなければ、消費した分の魔力

は回復しないため、やがて魔法も撃ち止めになった。
ユリーは水と食料が欲しいと心から祈っていた。その矢先にパンを見つけた。実際はただの石だった。両者を見間違えるくらいに、ユリーは精神的にも参っていた。
ひとひらの希望が消えたユリーは心が折れた。気力だけで歩いていたので、ユリーは動けなくなった。あれからずっと体を大の字にして天を仰いだままである。
やがて照りつける太陽の下で、彼女はそのまま気を失った。

## 第二章　オアシス街のパン屋

砂漠のオアシスに群がるようにして出来た町、ガラスベスは厳密にはカサオにもシャルデンにも属さないため、カジノが盛んだった。
その特性を活かしてこの町はいつも観光客でにぎわっていた。この町は若者に魅力的なリゾート地だった。
しかしここで稼ぐ商人たちは大変だった。自分の欲しいものを安価で仕入れるためには、砂漠を渡らないといけない。
だからこの町の商人たちは、年をある程度重ねると、稼いだ金を持って町を出る。

しかしたった一人だけ、あくまでこの町での商いに拘(こだわ)り続ける偏屈の老人がいた。パン屋のジャモである。
ジャモはシャルデンから仕入れた小麦粉を持って、ガラスベスに帰るところであった。
その途中で、ジャモは白い砂漠の砂の上に人影を見つけた。死にかけのユリーだった。
「この薔薇の文様は間違いない、司教様だ。お助けしなくては」
ジャモはユリーをラクダに乗せると家まで運んだ。

「気が付かれましたか」
目が覚めると老人がユリーの顔を覗き込んでいる。
「ここは？」
「砂漠の町ガラスベスでございます。私はこの町でパン売りをしているジャモと申します」
「あなたが私を助けてくださったのですね。わたくしはユリア＝シャーロットと申します。長いのでユリーと呼んでください」
いつも最初だけだが、相応の相手にはそれなりの礼を尽くす（もといネコをかぶる）のがユリーの性格である。
老人はユリーの名前を聞いてすぐに彼女の素性を理解した。

シャーロットとはローズ＝シャルデンで２番目に大きな領地の名前である。それは同時に代々シャルデンの軍を束ねてきた名門シャーロット家も指す。すなわち彼女はシャーロット家の次女、ユリア＝シャーロット様、その人なのだ。

「どうしてあなたのようなお方があのようなところに一人でいらっしゃったのですか？」

ジャモは素朴な疑問をユリーに尋ねてみた。

「こら暴れるんじゃない。この人はそんなにブスじゃないだろうが？」

「ちょ、ちょちょちょっとこのラクダ、ブスを乗せると暴れるの？」

「なんかの間違いだと思うんですけどねぇ～。お客さんそれほどブスじゃありませんから」

「そ、そそそ、それほどって、どどど、どういう意味よ？」

「失礼しました。思っていても言ってはいけないことをつい。」

「あんたらクビ～～～～～～！」

くそ、未だにムカつくわ。

ユリーの顔が急に険しくなったのを見て、ジャモはな

んだかまずいことを聞いたと思い、逃げるように台所へ水を汲みに行った。

水をたっぷり飲んで一息ついたユリーはお礼を言って立ちあがろうとした・・・しかし空腹のせいで、ふらりとよろめいた。

「ユリー様は衰弱しているご様子。何か口に入れねばなりますまい。どれ、私の焼いたパンでよろしければいくらでも食べてくださいな」

焼きたてのパンの匂いがしたので、ユリーは子犬のように鼻をヒクヒクさせた。水とパンが出てきた。お腹がペコペコだったユリーは、おもいっきりパンをかじろうとしたが、一瞬思いとどまった。砂漠での一件がトラウマになっているのだ。そこでユリーはパンを手でちぎり、ゆっくりと口に運んだ。

ユリーの仕草の一つ一つから彼女の育ちの良さが伺い知れた。なんだかんだ言っても、彼女はローズ＝シャルデンに帰れば、国の重役になることが約束された身分なのだ。

ユリーはパンのお礼に金貨を渡そうとした。

しかしここで思いがけないトラブルに気がついた。

「お金がない！」

どうやら砂漠で落としたらしい。お金がないとなると

体で払うしかない。
「おじいさん、パンを食べさせてくれたお礼に、何か私に手伝えることはありませんか？」
「う~ん、司教様にそんなことをさせていいのか分かりませんが、店番をお願いしても宜しいでしょうか？」
「かまいませんわ」
「ユリー様がいま食べたこのパンを私のお店で売って欲しいのですが、お願いできますか？」
「もちろんですわ」
ジャモの作るパンはとてもシンプルなものだったが、空腹のユリーには、それがたまらなくおいしく感じた。こんなおいしいパンをあたしは食べたことがない。ユリーはパンを全部売り切れると確信した。
しかしいざ店頭にパンを並べると全然売れなかった。
「暇ね～。パンが売れないと、あたし帰れないのに」
とても長く感じたバイトの一日が終わった。

# 第三章　美味・オモスビ

ユリーは落ち込んでいた。

パンが売れないのはあたしの売り方がヘタクソだからなんだわ。そう思うとおじいさんに申し訳なかった。

ユリーは、椅子の上に膝を抱えてちょこんと座り、上目遣いで売れ残ったパンをずっと見ていた。

そんなユリーを見かねたおじいさんは、実はパンが売れないのは、ユリーのせいではないことを教えてあげた。

「最近、オモスビ屋というのがあちこちに出来始めたんですが、それがとうとうウチの近所にも出来ましてね。」

「オモスビ屋？」

「オモスビは外国から来たパンですよ。ライスとかいう穀物で作るんです。なんでも腹持ちが良いと言うので、観光客に大ウケなんですよ。」

ユリーはオモスビに物凄く興味を惹かれた。

「おじいさんもオモスビ屋さんをすればいいのに」

「そういうわけにもいきません。このパンはシャルデンに住む私の息子が育てた小麦を轢いて作ったものです。私はこの小麦粉を使った料理で、妻の眠るこのガラスベスの人たちにどうしても喜んでもらいたいのです。最近は航海術の発達により、ライス以外にもネギ・大根・す

だち・・・珍しい外国の食材が次々と輸入されるようになりました。もちろんそれが悪いことだとは思いません。しかし、あたかも小麦の時代は終わったかのような、ここ数ヶ月のガラスベスの風潮が、私にはとても寂しいのです」

シャルデンでとれる小麦は贔屓目なしに良質である。

ユリーはおじいさんの話を聞くと、そんな得体の知れない穀物にシャルデンの小麦が負けるのが許せなくなった。

「おじいさん、このパン屋を立て直すわよ！」

「はぁ・・・でも、どうするつもりですか？」

「あたしに任せてよ。いぇい」

次の日。

ユリーはオモスビ屋さんとやらの偵察に出かけた。店に入りオモスビを注文すると、白い穀物に塩を振りかけて丸めたゲンコツくらいの大きさの食べ物が出てきた。

ユリーはこの料理に見覚えがあった。昔自分がクルルミクにいた頃、一緒にパーティーを組んだ剣士・高松綾歌が持参して食べていたおにぎ・・・おに？・・・名前は忘れたが、それと味も見た目も酷似している。

どうやらオモスビは綾歌の国・香川と縁（ゆかり）がある食べ物らしい。

香川の食文化はユラテリア大陸のそれとは比べ物にならないほど進んでいる。ライスはその香川国民の綾歌が認めた食材である。ただの輸入品でない・・・おじいさんには悪いけど、相手が悪い、そう思いながらユリーは３つめのオモスビを食べていた。

偵察から帰ってきたユリーにジャモおじいさんが声をかけた。

「どうでしたか。」

ユリーは、首を横に振ると、美味しかったと一言つぶやき、机に突っ伏してしまった。何の攻略法も見つからなかったのだ。結局自分はおじいさんのお金でライバル店のオモスビを３つも食べてしまった。相変わらず欲に勝てない自分がユリーはとても悲しかった。

確かにあのオモスビはハイカラだ。だからと言って負けるわけにはいかない。これはもはやパン屋とオモスビ屋の個人的な勝負ではない。ローズ=シャルデンのプライドをかけた戦いである。

本格的な新メニュー作りが始まった。

まずはユリーはオモスビみたくパンをギュウギュウに丸くめてみた。酷い見た目だとユリーは思った。ジャモおじいさんは、ぐちゃぐちゃになったパンを見て、悲しそうな顔をした。

ユリーはその晩涙で枕をぬらした。

一通り泣きはらした後、ユリーはふとんの中で祈りの言葉を紡ぎ始めた。祈りに使う言葉は神聖語である。司教でないジャモには神聖語の中身までは分からないが、娘の気持ちがよく伝わり、とても嬉しかった。

もっともユリーが神聖語で唱えていたのは―

おのれ～、オモスビ屋め、オモスビ屋め、オモスビ屋め～！許さないんだから！絶対に許さないんだから！

―完全な逆恨みの念仏だった。

ユリーは怒りが収まると今度は弱音を吐き始めた。

なんでよりによって美食の国・香川の作物がこんな所に大量にあるのよ・・・香川？そうだ！香川だわ！香川なのよ！

ユリーはふとんからムクっと起きあがると、自分の荷物の中から黒い液体の入った瓶を取り出した。

これは綾歌が自分にくれた「生醤油」という調味料である。珍しい調味料だが、どういう料理に使えば良いのかユリーは思い出せなかった。勿体ないので、ユリーは、ずっとサラの状態でこれを持ち歩いていた。過去にこの調味料を口にしたのは、水と醤油だけで凌いだあの砂漠の数日間だけである。醤油は腐らないように保存魔法がかけられていた。未開封の瓶については、ほぼあの当時

のままだった。

ユリーは醤油の瓶を手に取ると、いつも当時のことを思い出す。綾歌、ルーネット、シャーデー、お互いに命を預け合って戦った彼女達のことを考えるといつも心が温かくなった。

なのに彼女達のことをもっとよく思い出そうとすると、今度は決まって胸が苦しくなるのだ。これ以上は思い出してはならないのだと本能が訴えかけて来る。

そう、彼女達と力を合わせて戦った相手は、モンスターだけじゃない—ギルドだ。そして自分はそのギルドに捕まって徹底的に陵辱された。彼女達との日々の詳細を思い出そうとすれば、それに付随して、自分が犯された時のことまで思い出されてしまうのだ。

ユリーはそれが嫌で何かの拍子に浮かび上がろうとする過去の記憶に気付いては、手当たり次第に心の底に沈めて来た。

—あたしはこのままでいいのだろうか？—

ユリーの中で大きな葛藤が生まれた。心の中で強い自分と弱い自分が正面からぶつかる音がする。

—あたしは司教よ？神の子よ？汚れちゃダメなの—

—でも、本当にこのままでいいの？—

何度押さえつけても反語調で浮かび上がる自問。答え

は明白だった。―いいわけがない―彼女達があたしにくれたものと、おじいさんがあたしにくれたもの、そんな大事なものを自分可愛さのあまりに捨てていいわけがないじゃない。

ユリーは過去と向き合った。すると心の中で、２年以上閉ざされていた扉の鍵が開いた。おかげで悲しいことをたくさん思い出した。だけどそれ以上にかげがえのない思い出をたくさん鮮明に思い出すことができた。

記憶を取り戻したユリーにはオモスビ屋に勝てるカードがあった。「うどん」である。

そもそもおじいさんがパン作りに拘(こだわ)るのは、一人息子の育てた小麦を皆に食べて欲しいからだ。その気持ちを酌(く)むなら、必ずしもパンに拘る必要はないように思われた。ようは小麦の味をきちんと引き出せる料理を作れば良いのだから。

「うどん」とはユリーがクルルミクにいた頃、香川から来た綾歌が作ってくれた料理である。綾歌によれば、うどんは香川で最強の料理らしかった。綾歌は嘘を言わない性格である。現にうどんを一口食べたときの皆のテンションの上がり具合はとてつもなかった。シャーデーはソムリエのようにその味を延々と称え続け、ルーネットは「ふん、こんなもの」と言いつつ何回もおかわりを

繰り返した。

心の決まったユリーは台所に入った。

ユリーが台所でゴソゴソやっていると、ジャモが何事かと起きてきた。

「ユリー様、こんな夜更けに何事ですか？」

「オモスビ屋に勝てる方法が見つかったわ」

「ほほう、それは、それは」

「あたしが作るのは『うどん』という食べ物よ」

「うどん？パンではないのですか？」

「うん。でもちゃんとした小麦粉料理だから安心してね。それにこれがうまく行けば、パンの需要自体も回復するはずよ。今は町の人たちが、オモスビのせいで、ライスは小麦より優れているという強烈な先入観に苛まれているだけなのよ。長旅から帰ってきたあたしには、やっぱり故郷のパンはなくてはならないものだったわ」

「心強いお言葉でございます」

ジャモは自信に溢れたユリーを頼もしく感じた。彼女には何かやってくれるんではないか、という期待感を匂わせる所が最初からあった。ジャモだってユリーがパン作りに関して、ズブの素人であり、自分に適うわけがないことを知っていた。それでもユリーの目には力強い何かがあり、ジャモは最初からそれに賭けていたのだった。

「それじゃ、うどんをレッツクッキング！」

ユリーの頭の中で綾歌の声が再生される。

①『小麦粉に食塩水を少しずつ加えながらこねるのよ』

ユリーは小麦粉をこねくり回した。

②『今度はそれにコシを出すために足で踏むの』

ユリーは円を描くように生地の上を小股でクルクルと回った。

③『踏み終わった生地は涼しい場所で寝かせてね』

好都合なことに砂漠の夜はとても涼しかった。水分が飛ばないように布で包んでしばらく寝かせる。

「あの、ユリー様？イーストは入れないのですか？」
「入れないわよ」
ジャモは全身粉まみれになったユリーを見ると、それでも少し心配になった。果たしてこれで本当にオモスビに勝てるのだろうか？
そんなジャモを尻目にユリーは羽を抜いたボウガンの矢を使って生地を薄く伸ばし始めた。道具は違えどもユリーは完全にあのときの綾歌を再現していた。
「テメェーら、人間じゃね～！叩き斬ってやる！」
綾歌の口調を真似しながら、包丁で均等幅に生地を細く切り分けていくと、麺が完成した。
「茹でるわよ！」
「小麦を茹でるんですか？卵みたいに？」
ジャモは、茹で上がったうどんを見て興奮した。小麦を茹でると、こんなにも香ばしい匂いがするのか！ただただ驚いていた。ユリーは茹で上がったうどんに、ネギ、大根おろしを載せて、すだちを搾り、最後に生醤油をぶっかけた。
「これは凄い！・・・・ネギも大根もガラスベスの人達はただ焼いてパンのおかずにして食べていました。すだちに至っては観賞用だと・・・・」

基本的に料理は焼く！これがユラテリア大陸の食文化の現状である。

「ところでユリー様、これどうやって食べるんですか？」

ユリーは自分の荷物から箸を取り出した。

「それはなんですか？」

「これは箸よ。これでこうして・・・・」

ユリーは箸でうどんをひと掬(すく)いすると、一気にすすり上げた。

ちゅちゅるちゅる～～～～～～ちゅるん～～！

「おぉ！ユリー様、私もそれをやってみたいです。」

ジャモは生れて初めて食べるうどんに舌鼓を打った。水でしめたうどんの清涼感、風味、そして歯ごたえはどれも天下一品だった。なによりもこの生醤油という調味料は想像を絶するほど塩味とほのかな甘みのバランスが良く、その香も小麦の風味を最高に引き出すものだった！

この砂漠の土地でこんなに潤いのある食べ物を出されたら、ユラテリアの人々はいったいどんな顔をするのだろうか。ジャモは期待で胸を膨らませた。

# 第四章　巫女と浴衣

砂漠の土地に新たな名物店が誕生した。パン屋のおじいさんが、うどんを出す店である。店内ではどことなく高貴な少女が異国の服を身に纏いお膳を運ぶ。看板娘のユリーである。

店に訪れた客達は皆珍しい食べ物に感動した。これはうまい、これは面白いなどと口々に感想を漏らしながら麺を啜(すす)った。それはもう来る人、来る人、全員が全員、唸りながら夢中で食べたのである。

ジャモの店は、オモスビ屋に奪われた客をあっと言う間に取り戻した。

そんな人々の噂を聞きつけて、近所のオモスビ屋の店主がこの店にやってきた。店主はうどんを食べると驚い

たように言った。

「最近、近所の店で凄いメニューが出たというから来てみれば、これはうどんじゃないですかい。私も香川に行ったときにこいつを食べて感動した口でさぁ。それでこいつをどうしてもこっちの大陸に持ち帰りたくて、いろんな人に掛け合ってみたんですが、生成方法は門外不出らしく教えてもらえませんでした。・・・香川国民からこいつの作り方を聞きだすためには、それこそ生死をともにできる程の信頼関係が必要だそうですぜ。旦那、いったいどうやったんですかい？」

「すみません。それは教えられないんですよ」

そのやりとりを後ろで聞いていた浴衣姿の看板娘は、ニコリ笑った。箸はともかく生醤油の買い付けには、旧友宛に書いたユリーの手紙が必要だった。

「そうですかい。ところで今日は別れのご挨拶に伺いました。うちの店はせっかく苦労してライスを輸入しているのに、ここ数日パタリと客足が遠のいてしまいましてね。意地になって損を出してもつまりませんので、また商売ができそうな場所を探そうと思います」

ジャモおじいさんは、はっとした。自分の店の客が増えた分、オモスビ屋の客は減ったである。

そんな会話の一部始終を聞いていた看板娘が、両店主

の元に近寄ってきた。
「店をやめる必要ないわよ」
「お嬢さん、何か案があるんですかい？」
「あなた香川に行ったことあるなら、おにぎりを知っているわよね」
「えぇ、オモスビを香川語で言えばそうなりまさぁ～。もっとも香川の奴は中に具が入っていたり、形が三角や俵型で少し凝ってるんですがね」
「やっぱりあれはそうだったのね」
ユリーの言葉の意味が分からず、オモスビ屋の店主とジャモおじいさんは顔を見合わせた。

## エピローグ

「いやぁ～、司教様にはお世話になりました」
「これからは二人で力を合わせて頑張りまさぁ」
「良かったじゃない。あたしも楽しかったわ」
ユリーは二人に見送られて砂漠へ旅立とうとしていた。水も食料もガイドも今度は大丈夫である。
「それじゃあね」
「はい、お気をつけて」
砂漠の中に消えていくユリーを見ながら二人の男が

語り合う。

「まさか、うどんとおにぎりを組み合わせたメニューが、あそこまでウケるとは想定外でやした」

「確かに私も穀物と穀物を組み合わせたメニューなど、最初は気持ち悪いと思いました。てっきりユリー様はお戯(たわむ)れを申しているのかと・・・。しかしいざやってみれば、一足す一が三にも四にもなった、という感じですかな」

実はこの「うどん定食」をユリーが提案した背景にはこんなエピソードがあった。

昔、大食(おおぐ)いの綾歌が、皆でうどんを食べているときに、「おにぎりがあればなぁ」と言ったことがあった。おにぎりを知らなかったユリー達は、てっきり「鬼斬(おにぎり)」という綾歌の新しい必殺技だと思った。だからこそ、「完成を楽しみにしているわ」と口々に言ったのだ。

ところがその後、綾歌はおにぎりと呼ばれる料理を作りだした。うどんをたらふく食べて、お腹いっぱいだったユリーたちは全力で綾歌の行動を阻止したのだった。あの時、皆で胃袋が二つあればなぁ、みたいなことを言っていた。

よくよく思い出せば、クスリと笑えるエピソードではないか。今のユリーにはそれができた。

「ありがとう。あたし幸せものだわ。きっとユラテリア一のお金持ちよ」

そう呟くと、お金に無頓着なユリーは、女なら誰でも乗せくれるという、節操のないラクダに揺られながら砂漠の旅を楽しんだ。

（了）

【あとがき】

最後まで読んでくださいまして、本当にありがとうございました。ならびに作品を完成させるにあたって、アドバイスをくださった文屋様にも、併せてこの場で謝辞を述べたいと思います

最後に、この作品を読んで気分を害された方には、この場を借りてお詫び申し上げます。

茶太郎